

# PHOTO ESSAY

## 西条キャンパスの自然(動物)

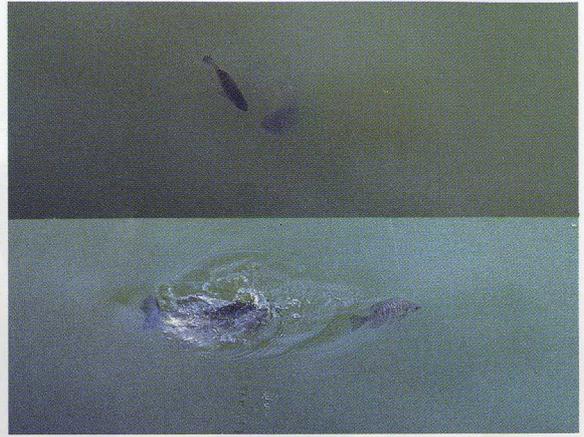
-14-

理学研究科生物科学専攻  
博士課程前期2年

近江智行



ぶどう池で釣りあげたコイと筆者



▲ブラックバスに襲われるブルーギル

▼ぶどう池のブルーギル



# ブルーギル

*Lepomis macrochirus*

西条には池が多い。キャンパス内にも山中池、ぶどう池、角脇調節池がある。池の中には魚がいる。魚と言えど釣りである。

私はよく、キャンパス内で釣りをする。すると奴らが良く釣れる。奴らの名前はブルーギル。和訳すれば青い鰓。スズキ目、バス科に属するタイのような形の魚だ。奴らを見ようと思ったら、池の岸辺に行けば良い。水草等の周辺に、数匹の群れで泳いでいるのを見つけたことができるだろう。釣りは魚と人との知恵比べだと言われるが、奴らを釣るのに知恵は要らない。竿に糸、糸に針、針に餌を引っかけ、群れの中に投げ込めば、早いときにはその瞬間に奴らが食いつく。多いときには一、二時間で数十匹釣れ、暑かろうが寒かろうが、奴らが釣れない時期はない。奴らに魚の常識はない。水面に石を投げれば寄ってくるし、餌ではなくてウキをつつくし、一度釣って逃がしてやっても、同じ奴がまた釣れる。好奇心を誘ってやれば、糸と針だけでも釣り上げられる。

ブルーギルは何でも食べる。浮遊動物、底生動物、小魚から魚卵まで、腹が減れば水草も食う。繁殖期は春から夏。池の底にすり鉢状の穴を掘り、一つの巣穴に五千個から二十万個の卵を産む。卵と仔魚は雄が保護する。

ブルーギルは元々日本の魚ではない。北米大陸の原産である。今から三十五年前、一九六〇年に皇太子殿下(現在の天皇陛下)が訪米の折、シカゴのシエツド水族館から十七匹が寄贈され、東宮御所で飼ったのが日本に入った最初である。その後、伊豆半島の一碧湖に放流され、釣り人が各地に移植、その食欲と繁殖力で日本各地に爆発的に広まった。西条でも、池や川などあらゆる所で姿が見られる。か弱い日本の魚たちは、奴らにすみかを侵されつつある。

冬の間、雪の降る朝、何度かぶどう池で釣りをした。さすがに凶太いブルーギルも寒さで動きが鈍ったようで、一、二匹も釣れば良い方、全く釣れない日もあった。

春になり、桜の花が咲き始めた頃、久しぶりにぶどう池に行ってみた。六匹のブルーギル、二匹のブラックバス、そして二匹のコイが一時間程の間に釣れた。針に掛かったブルーギルにブラックバスが襲いかかり、コイも一緒にそれをつつくという珍しい場面にも遭遇した。今までコイを釣ったのは小五の時の一匹だけ、ところがこの日は続けて二匹、もしや天変地異の前触れでは、と心配したが何もなかった。

ブルーギル。ちょっとお馬鹿なかわいい奴。子作り、子育てに熱心で、爆発的に増殖し、分布域をどんどん拡大。好奇心旺盛。雑食性。生態系の破壊者として悪名高し。

ブルーギルという魚、どこか人間に似ている気がする。

(おうみ・ともゆき)